

# 秘密その二 ホームヘルパーが朝昼晩、現われる!

## ●街かどには車いすの高齢者が

ヨーロッパの国々では、どこを探しても、寝たきり老人の集団が見当たりません。そのかわりに、車いす姿の高齢者に、街かどで、レストランで、商店街で、あちこちで出会います。なぜ、そんなことが可能なのでしょうか?

私は、たちまちアガサ・クリステイの心境となり、なんとしても、その秘密を解きたいと思いました。ところが、この迷探偵はたちまち迷路に入り込んでしまいました。

その疑問を高齢者福祉にたずさわる人々に直接ぶつけてみても、はかばかしい答えが返ってこないのです。先方は「寝たきり老人」というものを見たことがないので無理もありません。日本の状況をいくら説明しても、のみみめならしいのです。どんなふうになすねたらいいものか……。

旅が終わりに近づいたある日、ふと思いついて、こう質問してみました。

「自分では寝返りもうてない半身不随の高齢者がいたとして、その人はどんなサービスを受けているのか。一日の時間を追って、具体的な例で話していただけますか?」

図書出版 **ぶどう社** 著者 **大熊由紀子 著**

**寝たきり老人のいる国はない国**

定価 1572円 (8%税込)  
本体 1456円

OECD加盟国のホームヘルパーの数(1985年前後)

	実数	人口10万あたり	日本を1とすると
ノルウェイ	41,468	998.0	51.5
スウェーデン	70,780	847.7	43.7
デンマーク	24,086	471.0	24.3
オランダ	30,718	212.1	10.9
イングランド	94,122	189.1	9.7
日本	23,555	19.4	1.0

ノルウェイとスウェーデンは公認家族ヘルパー(それぞれ総数の41%、8.5%)を含む。オランダはフルタイム職業。  
(二木立 検証・日本医療の論点(1988年1月号))

孫娘ではありません。ホームヘルパーでした。マルメ



スウェーデンの南端の町、マルメの、スロットスターデン・サービスセンターでのことでした。それまで、私の質問に答えあぐねていた所長モニカ・ハマーストリームさんは、ほつとしたように言いました。

「そういう質問なら、簡単に答えられるわ」

## ●住民一万人に四〇〇人のヘルパー

たとえば、七五歳で独り暮らしの女性ブリッタさん。

彼女は脳卒中後遺症で十五年前から半身不随です。糖尿病の持病があり、狭心症の発作をたびたび起こすのですが、住み慣れた家での暮らしが気に入っています。

〈朝〉 ホームヘルパーは、ブリッタさんの家に着くと、預かっている鍵でドアを開け、続いて窓を開けます。彼女をベッドから助け起こします。トイレの世話をし、歯みがきを助けます。今日はどの服が着たいかをたずね、着替えるのを手伝います。車いすに乗せます。

オープンサントの軽い朝食の準備をし、食べるのを助け、「お昼にまたね」と帰っていきます。

〈昼〉 同じヘルパーが、再び訪ねます。

車いすを押し、デイセンターのレストランへ連れ出します。外出したくないという日には、温かい昼食がセンターから配達されるので、これをデー

ブルにセットして話し相手になります。

彼女は猫をかわいがっているの、その世話も。観葉植物を大切にしているの、その水やりも。曜日を決めて、洗濯や掃除や買物。彼女が望めば、車いすを押して一緒に買物に出ます。

〈夕方〉 朝昼とは別のホームヘルパーが、夕食の世話をするために訪ねます。

〈夜〉 再び夜のホームヘルパーが現われます。歯みがきと着替えの手伝いをして、ベッドへ。

\*

このサービスセンターは、周辺一キロ以内に住む一万世帯、一万五千人の人口を受け持つていました。センターを中心にホームヘルパーの詰所が二〇カ所配置され、そこを拠点に四〇〇人、三三班のホームヘルパーがいて、身の回りのことができない高齢者や体の不自由な人たちの日常生活を支えていました。

一万人の地区に四〇〇人のホームヘルパーがいる！朝起こしにきてくれるホームヘルパーがいる！その数の多さと仕事の内容に、私は茫然としてしまいました。

一週間に一回訪問してくれて二時間くらい家事を手伝ってくれる人。これが、日本に住んでいる私のホームヘルパー、つまり家庭奉仕員のイメージだったからです。

北欧の国々に「寝たきり」のお年寄りがいない。

その最大の秘密は、日常生活の節目節目に現われるホームヘルパーの存在だったのです。

その人々が毎朝「起こして」くれるから「寝たきり状態」にならない。私たちの国では「寝かせたきり」にしているから「寝たきり状態」になってしまう。

日本にいたときは予想もしていなかった「発見」でした。

## 秘密その三 アマチュアピロの違つてゐるは……

### ●デンマークの平凡な町で

それから二年後の一九八七年の八月、私は夏休みを利用して、貯金を下ろしてデンマークへ出かけました。前田信雄札幌医大教授を中心とするグループが、デンマークの首都コペンハーゲンの西六〇キロにあるホルバックという町に一週間余り滞在すると聞いて、仲間に加えてもらったのです。

「外国の客にわからないとこか」に「寝たきり老人が隠されている」のではないかと。

それを、もう一度、確認せずにはいられなかったからです。本当のところ、どこかに寝たきり老人の集団が隠されているのではないかと、私はまだ、心配だったのです。

「敬老の日」のコラムの見出しを「『寝たきり』いない訳ではなく『寝たきり』少ない訳」と控え目な表現にしたのも、その心配が、私の心のどこかにひっかかっていたからでした。

デンマークの高齢者は、自宅か、ケア付き住宅か、日本の特別養護老人ホームにあたる「ブライエム」に暮らしています。こうした人々を、私は訪ね歩きました。

日本風の「寝たきり老人」の集団は、やはり、見つかりませんでした。

死が間近でベッドから起き上がれない人、「今日は寝ころんでいたい気分なので」と横になつている人、意識不明が続いている人……。四つのブライエムを訪ね歩いて、ベッドに寝ている人はたった四人しか出会いませんでした。

\*

ホルベック、そこは、なんの娯楽もない人口三万二千人の町です。

前田教授がここを選んだのは、世話をしてくれたコペンハーゲン大学のヒヨン・ホルスタイン助教授が子どものころからそこに住んでいるので、ぶつうのデンマーク人の生活ありのままを見せてもらえそうだからでした。福祉のレベルがデンマークの二七五の市町村の中で「中の下くらい」というのは、記者の私には好都合でした。

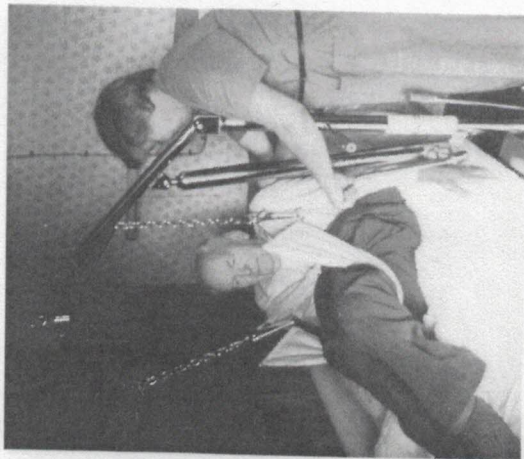
ホームヘルパーの数も、人口三万二千人に対して一三八人。一九八五年に訪ねたスウェーデンのマルメの足元にも及びません。けれども、日本とくらべると、人口あたり二〇倍以上になります。

### ●残された力を引き出し、活かす

ホームヘルパーの基礎教育指導の教科書を見せてもらいました。目次には、こんな項目が並んでいました。

- ◇体の不自由な人について、◇社会について、◇ホームヘルパーの法律上の補償と義務
- ◇病気について、◇看病について、◇リフトテクニック、◇時間配分
- ◇人間を知ること、◇お年寄りを knowing すること、◇家族を知ること

「リフトテクニック」というのは、ベッドからひとりでは起きられない人を、補助器具を使って車いすに移したり、再びベッドに戻したりする技術(写真・次頁の右)のことです。「お年寄りを knowing すること」とは、たと



この男性は指の先が少し動くだけ。ホームヘルパーの助けで自宅で独り暮らしをしています(赤平純一撮影)

えば、「お世話をしすぎて残っている能力を損なわないように」「潜在能力を引き出して活かすように」すること、それを実践できる能力を身につけることを意味しています。

この町で、私はこの「残存能力の活用」という言葉を何度も聞きました。デンマークの「高齢者医療福祉政策三原則」の柱のひとつなのだそうす。

\*

ホームヘルパーの仕事ぶりを見ていると、さすが訓練を受けたプロだけのことはある、と感心します。お年寄りを上手に励まし、先を急がず、ゆつくり待つのです。

私は、日本でお年寄りを世話している「オヨメサン」と呼ばれる人々の姿を思い浮かべました。お嫁さんは息子の妻です。気がねがあります。つい過剰なお世話をしてしまいます。「寝かせたきり」の状態、食事を口に運び、おむつを取り替え、体を拭き、なんでもしてあげてしまいます。

お年寄りを赤ちゃんのように世話する病院の付き添いさんの様子も、同時に私の目に浮かびました。

「あーんちてこらん。そうそう。おいちい？」

その、優しいけれど、知識に欠け、誇りを尊重することを忘れた看病が、「寝たきり状態」をつくってしまうのでしよう。

障害をもつわが子を不憫と思う親たちも、同じ過ちに陥りがちです。



日本の在宅福祉・在宅医療は「丈夫なお嫁さん」の無償の献身を当てにしています

## ●これはもう女工哀史の世界

日本ではこれまで、身の回りのことができない人々の世話は、「家族」が担うものとされてきました。自身自身それを経験したこともなく、するつもりもない男性の行政官や政治家の多くが、「家族が世話をする」という前提で福祉の政策をたててきました。それは、うるわしい風習として、海外にも知られています。

けれど、現実には、うるわしいところではありません。労働基準法が女性に禁じている「三〇キロ以上の重量物」を毎日のように持ち上げなければなりません。しかも、二四時間気が抜けない、休日もない、疲労困憊の毎日が際限なく続きます。これは、もう女工哀史の世界です。

一方、ホームヘルパーは「お嫁さん」と違い、交代制です。

ヨーロッパの国々では、パートタイム制も大いにとり入れています。ホームヘルパーの仕事には、繁忙の波があるからです。ベッドから起こして着替えの世話をする時間や、温かい食事の出る昼食の時間に、お世話をの仕事を集中しています。こうした時間帯はうまく具合に、幼い子を持つホームヘルパー志願者が外出しやすい時間です。夜や休日を担当するのは、昼間、大学などに通って勉強をしておきたい人たちです。こうした人々も上手に組み合わせて二四時間をカバーするのが、北欧の国々のやり方でした。

日本のパートタイムには、「臨時雇い」の意味が込められています。北欧では、フルタイムもパートタイムも、身分や待遇はまったく変わりありません。働く時間数や時間帯が違うだけです。

ホームヘルパーには、休暇も確保されています。仕事で疲れはてることはありません。そのせいでしようか。終始笑顔を保って、はつらつとしていました。介護される身にとつて、笑顔は薬よりずっと効き目があるにちがいません。

## ●親を病院に「捨てる」

誰だつて際限のない介護地獄からは逃れたいくなります。

日本の特別養護老人ホームはいつも絶対数が不足しています。そこで、「死ぬまでお預かり」を暗黙の条件にした一群の老人病院が、家族の切羽詰まった要望に応えることとなります。老人ホームでは外聞が悪い、面倒をみない嫁はけしからん、そう親戚に思われては困る。そんなふうを考える人にとつて、「病院」は「世間体がいい」から好都合です。

ですから、本来の老人医療をめざそうとしている老人病院の職員たちは、家族から見当はずれな相談をもちかけられて、辟易しています。たとえば、こんなやりとりが『ばんぶう』という医療専門誌に出ていました。

家族 「うちの年寄りを入院させたいんですが、ベッド空いてますか」

ソーシャルワーカー 「どこか、お悪いんですか」

家族 「年のわりには元気なんですけど、親族で話しあつて入院させることに決めたんです」

ソーシャルワーカー 「リハビリテーションを受けたいのですか」

家族 「いいえ。もう長くないと思いますので、最後まで面倒をみていただきさえすれば、それでいいんです」

この医療ソーシャルワーカーは猪俣智成さんです。こうした毎日への疑

ホームヘルパーは台所仕事をしながらも笑みをたやませません。おしゃべりも仕事の内



問もあつて、最近、病院を辞め、高齢者生活福祉相談所を開きました。その猪俣さんが言います。

「この日本ではホームヘルパーの助けも名ばかり。世話をしている人は気晴らしのチャンスもない。精神的にも肉体的にもへとへとになります。お嫁さんのほうが先に死んでしまいそうになります。だから、親を病院に捨てる。それしか選択の道がないのです」

\*

捨てた家族は気がとがめます。見舞いの足も遠のきます。

次頁の写真は、そうした需要に応えた収容所型老人病院のひとつです。

お世話の手を省くために、見舞い客が帰ると、手のかかるお年寄りをベッドに縛りつけてしまうのです。この病院を監査している神奈川県衛生部や保健所は「中程度の病院」と評価していました。(詳しくは朝日新聞社刊『ルポ老人病棟』を)

私は科学部時代から医学分野を長く担当していたので、同僚から病院選び、病院探しの相談をしばしば受けます。最近増えているのが、こんな相談です。

「実は、おぶくろを見舞いにいったら、縛られたあとが腕についているんです。縛ったりしない、いい病院はないでしょうか？」

一九八九年五月に、私が司会した国際シンポジウム『真の豊かさへの挑戦』の席で、声楽家の志村年子さんは、実の母を病院に預けた経験を、こう話しました。

「そこは、一般病院の老人病棟で、夜徘徊する方は手足を固くベッドに縛りつけられていました。母は入院一カ月でみるみる意識もろろの寝たきり状態になっていきました。私は、歌を捨てても母を世話する覚悟で、退院させました。そのとき、隣のベッドの人が全身の力をふりしぼって私の手をにぎりしめ、『どう

か、私も連れていつて』と泣きながら言いました。自宅に戻った母は一年後にはおむつもとれ、立つて歩けるようになりました。けれど、母の隣のベッドの人の悲しい声と姿が、五年たった今でも、頭から離れません」

海外にも知られたるわしい「日本型福祉」「家族的な介護」は、実は「親捨て」「子捨て」とセットになっているのです。

### ●親子の絆が強い北欧

とはいえ、親の介護をホームヘルパーなどのプロに任せてしまつたら、親子の絆は薄くならないのでしょうか。

そんな疑問を私が口にしたら、コペンハーゲン大学社会医学研究所の伊東敬文主任研究員が、ひとつの調査結果を見せてくれました。

その調査は、子と別々の家に暮らしているデンマークの高齢者千五百人を対象にした調査です。それによると、「今日または昨日、子と接触した」が43%、二―七日前が36%、八日―一カ月前が15%、一カ月以上前はわずか7%でした。

ほとんどの親子が電話で毎日のように連絡をとりあっています。四割が十分以内に行ける距離、七割が三〇分以内に行ける距離に住んでいます。日本のほうが、家族の絆が弱いのではないのかしら。私はすっかり考え込んでしまいました。

日本の病院では「縛る」とを「制約」といいます。制約は日本のおもちゃで見られます

